

中村眞一郎集

# 中村眞一郎集

新編 中村眞一郎集

河出書房

7 2 2 0 1 5

# 中村眞一郎集

新文學全集 第八回配本

昭和二十八年一月五日 初版印刷  
昭和二十八年一月十日 初版發行

定價 二三〇圓  
地方定價 二四〇圓



著者 中村眞一郎

發行者 河出孝雄

印刷者 山田一雄

發行所 東京千代田區  
神田小川町三ノ八  
株式會社 河出書房

電話神田(25)三一七四番

精興社印刷・横田製本

目 次

死の影の下に

三

檻

一六

雪

一六

魔女の愛

二三

情熱の幸福

二三

輪廻の暦

二三

明るい庭

二四

あとがき

二四九

年譜

二五〇

装幀  
協田  
和

中村眞一郎集



# 死の影の下に

## I

私は突然に足を停めた。一體、何だらう？ 私は心の底の不安のやうなものを捉へようとして軽く首を傾けた。先程から歩きながらの間に次第に意識の裏側で擴り始めてゐた曇り空のやうなものが、強い衝動となつて心臓に動悸を呼ばうとする瞬間に、私は私自身のとりとめのない夢想から眼覺めた。そしてその同じ瞬間に私の不安そのものも捉へ難く何處かへ退いて了つた。丁度長い間掛けられてあつた繪が取り去られた後の、そこだけが變に不自然に四角く白く浮出た壁のやうに、また突然に退學した學生の席が、眼ざりな程生なまとその不在の雰圍氣を漂はせてゐるやうに、私の心は先程までの何かが急に消え去つた後に、名狀し難い深い匂ひのやうな氣配を擴げ始めてゐた。

私は立止つた儘あたりを見廻した。足許から緩かな坂が次第に登つて行く。眞晝の翳のない日射しの中で、數十年の歲月に磨り減らされた、光つてゐるために透明な程に見える石疊。その上には道の兩側の石壁が狭いけれどもつきりと碁盤縞の影を浮上らせてゐる。私の眼は先程から歩きながら此の景色を眺めてゐた。そしてそこから一種の不安を吸ひこんだ。それをはつきりと意識して正體を見窮めようとした瞬間に全ては漠然と消えて了つた。夢の中の人の顔を正確に突きとめようとする、全てが失はれて了ふやうに。……此の何の生氣もない、純粹に物ばかりで出来てゐる景色。光と石。人通りもなく人間的な聯想を喚ぶ一切のものの缺けてゐる視野。——私は知らず識らずの間に、畫家が畫面の上で配置上行ふ、樹木の枝を勝手に刈り込んだり、背景を無造作に空一色に塗りつぶして了ふのと同じ操作を、現在の精神的雰圍氣に調和させるために此の風景に對して行つてゐた。坂の上に重なる街々は未來の遠くに無限に小さく見放され、今横切つて來たばかりの電車道は既に過去の中へ遜しやかに退いて行つてゐた。此の非情な風景は、私と云ふ認識主體が消え亡せた後も尙、此の儘白と黒の對照の中に静まり返つてゐるのだらうか？ それとも全ては闇の底へ崩れ落ちてしまふのか？ 此の單純な疑問が急に私の胸を冷くした。そしてそれこそ先程の不安を言葉に翻譯したものであると氣付いた。勿論、絶えず育つたり凋れたりしてゐる不安は、概念に置き換へられる



と同時に停止して、その氣配のやうなもの生氣のやうなもの  
のを失つてはしまふが。——何か喪失のやうな感情。それが  
先程から此の風景の前で私の意識の底から香の烟のやう  
に立昇つてゐたものに違ひない。私が死んで了つても此の  
道は、相變らず同じ白い太陽の下に同じ影を描いてゐるの  
か？ 然し誰のために？

私はいつの間にか歩き出してゐた。すると片側の石壁が  
突然に斷ち切られたやうに一個所に穴を開けてゐるのに氣  
付いた。そこから鬱蒼たる茂みと裸の褐色の土とが、荒々  
しい對色で覗いてゐる。私は死の想念から半ば無意識的に  
逃れようとして、石塊と丈高い雜草とを踏み分けて、石壁  
の中へ入つて行つた。そこには崩れかけた白いペンキ塗りの  
ベンチが樹木の下に捨てられてある、永い間誰にも腰か  
けられたことのない、忘れられた無名詩人のやうな。私は  
新聞紙を擡げてその上に腰を下ろし、靴の先で地面を掘つ  
てみる。踏みじられた草から、若い生命に満ちた匂ひが  
立昇つて来る。強く眼を射る、熱いやうな赤土の色。そし  
て周りの林の地面に、野草や落葉や白い小花やの上に、黄  
色に葉洩れ陽の描く、豊かな濃淡の線の戯れ。印象派の畫  
家達が光線を描いたとは、物の面に生の感情を發見したと  
云ふことではないだらうか？ ……私の中には突然に、或  
る耳馴れた提琴協奏曲の旋律が、よびかつて來た。

此の曲調——明るく愉しく生の平和を謳ひながら、淨福  
の階段を駆け上り駆け下りる此の主題。私はその流れの中

に妨げるものなしに魂を溶かして行く。死の感情のために  
堰き止められてゐた内部の持續が、自然に奔放に遊戯のや  
うに走り廻る。それは敗退した不安の、限りなく遠ざかり  
行く、その後姿に對して、生の注せる典雅な祝祭曲。花々  
の甦生した香りの中を、悔恨の叫びと共に逃れ行く冬の王  
の、背後から湧き上る復活祭の春の齊唱。匂ふ若葉、饒る  
小鳥、閃く白雲、幼兒の明るい笑聲。全てが何時のまにか、  
吹雪が櫻と變るやうに、虚無の底から生れて延びて行く。

——此の旋律が最初に私の中に恢つたのは宿命的なあの日  
だ。そして矢張り突然に死から解放された瞬間だつた。  
……それは私の生を支へてゐた最も大きな柱の遂に打折れ  
た日。三月もの永い間、或は恢復の偽りの徴しを見せては  
ぶり返し、或ひは絶望の淵の口もとまで行つては引返し、搖  
れに揺れ、次第に激しくなりまさる嵐の中で、遂に一息に  
打倒れて了つた——父の死——それまで一瞬の休みもなし  
に私の心の底までも掻きたててゐた、父の死に對する不  
安、若し父が死んだら私はどうしよう、若し父が死んだら  
父は虚無の底に沈んで了ふのか、若し父が死んだら父のし  
かけた全ての仕事は骨組の儘で誰にも知られずには失はれて  
了ふのか、若し父が死んだら父の開けた入組んだ空洞を社  
會はどのやうに繕ふのか、全てのさうした心配は父の死と  
云ふ事實の前に忽ち一掃されて了つた。

人の死は山奥の森蔭で死ぬ靜かな動物の死とは異ふ。そ  
れは煩雜な法律的經濟的習慣的な社會機構を一時に恢らせ

る開幕の合圖である。大學病院で父の友人の白髪の教授が枕頭で嚴かに頭を下げて咳いてから十分後には、私の周圍は忙だしい空氣に満ち、よく顔も知らない父の會社の社員達が、或ひは憂鬱な或ひは元氣な顔で廊下を往來し始めた。すると今上海から飛行機で驅けつけたが五分違ひで間に合はなくて残念だと歎聲をあげた、あから顔の廣川社長が、傍らの椅子に茫然と坐つてゐる中學生の私を見ると、一寸と云つて指で合圖して、例の事務的な調子で私を部屋の隅へ呼び、二三人の辯護士の名前を擧げた。私が不審さうに病院へはさうした種類の人間は誰も來なかつたと云ふと、彼は急に快活な笑ひを立て、死骸の傍らであることに氣付いて、大きな手巾を口に當てて顰め面をした。

——いや、よろし、よろし、私が萬事あんじよう致しませよつて、坊んちは大舟に乗つた氣でゐなはれ！ あ、山口君、お冷やを一ばいよんでんか、いや、そのコップでええわ。大きに。

私には此の脂切つた大きな紳士の何を云はうとしたのか、又、父の死と辯護士とどう云ふ關係にあるのかが判らなかつた。ただ社長が上機嫌の時に濺發する大阪辯によつて、彼が陽氣な氣分の中にあると云ふことを知つただけだつた。傍らの私は此の有能な事務家の、周圍に振り撒く活氣のある雰囲気で忽ち愉快にされた。——此れから、私、あんたの親代りだつせ。親代りだつせ。……

それから數分後の私は、此の死の惹起した寧ろ快活な位

みの組織の中に組み入れられて、大學の傍らの郵便局に私の家の私的な交際範圍へ父の計を報ずる電報を打ちに行くために、鋪道を急ぎ足で歩いてゐた。——坊んち、同文電報云はにやあきまへんで。よろしか、同文電報やで。……ばらばらと降つて來た氣紛れな雨のために、忽ちに眼の前の鋪道が濡れて行つた。その中を傘もささず、帽子も被らずに、小走りで行く私の心は、永い間の苦しい不安から今こそ決定的に解放されたと云ふ利己的な喜びのために、ほてつた頬にあたる冷い雨滴も愉しく感じられた。その時、軽い足取りの間から、不意に此の提琴協奏曲の第一主題が溢れ出て來たのだつた。次第に茂くなりまさる雨足は、高揚して行く裝飾句と諧和し、傍らを大きな音を立てて市電が通り過ぎると、その直ぐ後から第二主題が火花のやうに生れて、心の地平に明るく大きく曉のやうに擴つて行つた。

父の死の直後に私の落入つた此の精神状態は、凡ゆる私の豫想を裏切つてゐた。父の瞑目、それと同時に私のしなければならぬ儀式的な配慮、周圍の人々に對する挨拶、内氣な私が想像するだに暗い氣持になるさう云ふ外的な顧慮、そしてそれを押ししなければならぬ嗣子としての私と、唯一人の愛するものを失つた孤兒としての絶望的な私との平衡の破壊。每晚悪夢のやうに私を惱ましてゐたさうした心配は、廣川氏の世慣れた采配できれいに一掃されて了つた。その上、私の生涯に於ける最も悲惨な瞬間を既

に經驗してつたと云ふ不思議な安心。此れは私が死の想念に包まれながら、何等の不安を抱かなかつた、最初にして唯一の時間だつた。

勿論私はそれ迄に幾つかの死に立會つて来た。また死を豫感させる幾つかの事件にも。先程道を歩きながら漠然と感じた奇妙な喪失感。人生の何でもないやうな日常の間に、白光の下の小砂利のやうにきらりと閃いてまた消える意味深い瞬間。——それは私の極く幼い緑色の田舎暮しの間にも、既に人生の無常さを豫感させて幾度か私を脅かした。

その最初の死よりの呼掛けは一冊の本からであつた。生活の大部分を上海や大阪や東京やで暮してゐる父親から、時々便りと一緒に菓子だの玩具だの、田舎では見ることに全くない、驚く程新型の洋服などが送られて来た。また此んな贅澤なもんを。費ふことばつか考へて。……とその度に伯母は荷物の上包を手につつた儘で溜息をつくのだけだつた。「此んなハイカラな洋服を田舎で着て歩けすか。」さう云はれると、私も吊紐つきの洒落た茶色の牛ズボンに緑の縦縞の開襟シャツを着て、學校へ出掛ける勇氣はなくなつて来る。隣の豆腐屋の利いちやが慌てて——今日は何かお式でもあるらか? とまた訊くかも知れない。此の都會の子供の避暑地の輕装が、汽車の沿線から三里も入つた田舎の小さな町では、禮装のやうな晴がましい印象を與へるに相違ない。……然し私は伯母にせき立てられてお禮の手紙を書く。私が勝手な感想やら友人の話やらを書き始める

と、伯母は覗き込んで注意する。伯母にとつては手紙はそんな饅舌ではない、きまつた様式のあるべきものである。伯母は父から私を預けられてゐて、決して盲目的に甘やかしてゐるのではないと云ふ證據、立派なしつけの表現のお禮の手紙に見せようと懸命なのだ。私は仕方なしに書き直す。私が最も悲しいのは、いつも父の葉書の終りに、何でも好きなものを言つてくれれば送つて上げますと繰返してゐるのに、伯母は私の望みを書くことを許さないことだ。

——此れだけでも何百圓づらか判りやせんに、またねだつたら、お父つさは叱るに決つてゐるらよ。……それから伯母は神祕的な微笑をする。それは私にそれ以上の質問や抗辯を禁ずる、漠然とした不信任のやうな表情、——自分の今述べた理由の拙さ、またさうした言葉を氣拙い思ひをして述べねばならないやうになつたその場の成行に對する、對象の不明瞭な怒り、無邪氣な私に對する憐みともどかしさ、さうしたものの解き難く纏れ合つた判り難い眼差し。その瞬間に、常には私に限りなく近くあり、私自身と殆んど見分けることの出来ない伯母が、突然に私から離れ遠ざかり、私の理解を超越した一人の他人、私とは全く關係のない一人の大人となる。私は急に支への手を離された幼児のやうに躓きさうになる。

大都會の中で氣樂なやめ暮しを續けてゐる父は、時々(一年に精々二三度)舞ひ込んで来る、無器用で無表情な手紙を見ると、自分に子供があると云ふ事實を、奇妙な驚

きと共に想ひ出して急に陽氣になる。それから百貨店へ出掛けて行くと、衣類から學用品から山と買ひ込み、何時も父の周圍にゐる友人達も氣紛れに菓子などを買つてくれ、その荷物の中に入れる。——此の時ならぬ贈物はさぞ草深い田舎を駭驚させるだらうよ。——いや、結婚夫人のやうに、『奥さん、何か記念にお受取り下さいませんか?』と此つちが出る、『何でも?』と來るね。『はあ何でも結構です。私の心でも。……』『あらそんなものが戴いても。今年の型のセダンのパッカード。それと。……』『いや、それだけで結構。とても私では、いつそ野々宮のぢいさんにも御無心なさつては。……』『てな無器用なことになると、贈物もうつかり出來ないが。——そこで新劇俳優の原口氏が大きな包みにびつくりした田舎人の表情を方言混りにやつてみせ、一同大笑ひの内に私の存在は消えて了ふ。それから彼等は百貨店に横付けになつてゐる浮田子爵の自動車にまたどやどやと乗込むと、一晚を愉快に踊るために横濱へドライブするのだつたに違ひない。それから一週間もすると、伯母はまた大きな荷物を開きかけたまま歎息する。——こんながんに洋服を一體此の子一人で着れると思つてゐるづらかさう。一年もすりやあ、はあ脊と合はんやうになるづらに。……そのくせ直ぐに着ようと云ふ私に反對して、勿體ながつて仕舞ひ込み、着ないで小さくして了ふことにするのは必ず伯母だつた。尤も伯母には此の大量の荷物が何を意味するのか全く判らなかつたのだ。それに時に

は父の友人達の一人が何を考へ違ひしたのか、荷物の中からは女の子の服の出で來たことがあつた。私の名前の女らしさが誤解させたのかも知れなかつたが、伯母は此の亂調子な贈物に父親の愛情を見出せなかつた。伯母にとつては愛情とはもつと儉しやかなものであつたらう。此の大量生産のどれにも七八歳用の兒童夏服と云ふ紙札のついた、百貨店の衣類は餘りにも空々しくあつた。父の發作的爆發性の父性愛は伯母には奇妙な嫌惡を呼び起し、父の都會生活に疑惑の眼を見開かせた。だが少年の私には此の、年に二三次の贈物の雨は、東京や大阪や上海を寶物の咲き満ちた樂園のやうに錯覺させた。大きな自動車や電車の右往左往する大都會の上空に、モーニングを着た父親は大きく神のやうに立ち、周圍に友人達を天使の群のやうに居流れさせ、明るい電飾の廣告塔を背景に、きらきらと閃めく星を、攪げた兩手の先から降らしてゐる。その星は夫々萬年筆であり三輪車であり玩具の汽車であり音器である。

そんな包みの中から或る時數冊の本が出た。その中の一冊には紙が挿んであり、「此の本はお父さんの友達の偉い小説家が子供のために書いたものです。今刷り上つたばかりの一冊をお前にと云つて持つて來てくれました。お禮の手紙をお出しなさい。」そして關西の住所と上村登志雄と云ふ名が書いてあつた。(關東大震災直後で文壇人も關西移住が多かつた。それに帝都復興のためと新企業を起すために灰燼の東京を見捨てて一齊に大阪に走つた實業家の

中で、父も最も敏腕な事業家の一人として、九月の下旬には既に徒歩で大阪に乗込み、上海時代の取引先である廣川氏を説いて、一旗擧げようとしてゐた。浮田子爵も葉山の別荘の倒壊で病中の夫人を失ひ、紀尾井町の邸はその儘にしておいて、幼い娘と生れたばかりの男の子とを伴れて、久し振りに京都の邸へ戻つてゐた。また俳優の原口氏も一座を擧めて關西を廻つてゐたし、畫家の宮田氏も一時寶塚の裝置家になつてゐたし、仲間の中心の結城夫人も神戸へ歸つてゐた。つまり父の交遊は社交界そのものの西漸と共に關西に移つてゐた。従つて此の時の包みも確か日本橋の三越や白木屋ではなく、心齋橋の大丸のやつたに違ひない。その數冊の本の中で然し私が一番氣に入つたのは、上村氏の贈物よりも『千一夜物語』——豪華な繪入りの大型の書物——だつた。手に取ると直ちに判る高價な紙質の匂ひ、飄々とばりばりと音がして新しい頁がはがれ、クリーム色の地に赤と黒との二色で本文が刷つてある。そして美しい女王の微笑みを金色に冠せられた見事な絹のしをりが、頁の間に燃えるやうな緋色が挿まれてゐる。いつの間にか指先についてゐる金粉。そして怪奇なその内容は、……大理石の大きな浴場の中で戯れてゐる裸婦達。大きなマントを擴げて黒い空を飛んでゐる惡鬼。馬や駱駝の間で熱心に話し合つてゐる、ターバンを巻いた商人達。沙漠の綠地で午睡の夢に耽つてゐる若い王子。峻しい岩山を傳つて寶石を運んでゐる盜人の群。そんな幻想の大輪の花々に忽

ちにして取巻かれて了つた私は、その晩からその強烈な匂ひの奥で際限もなしにアラジンやシンドバッドに轉生するのだつた。

一體、私が此等の最初の書物から學んだものは二つある。夢と人生。——此の二つの主導調はやがて私の全生涯を晝と夜とのやうに交互に支配し、私の人格を奇妙に分裂させて行き、私の行動を贅の多いものにして行くのだが、最初にその二つのものの存在を意識したのは此の時だつた。『千一夜物語』を讀み耽つてゐる私の落入る夢想状態は、それまでの日常生活からは全く關係がなく、それは退屈で狭くるしい單調な田舎暮らしの外に——さう日常生活を意識するやうになつたのは、その夢との對照によるのだが、即ち夢から醒めようとして突然に外部に對して新しく抱く嫌惡感によるのだが——精神の内部に輝くばかりの變轉を可能とする領域が限りなく大きく開けてゐると云ふことを、始めて氣付かせてくれた。黄色い顔のアリ・ババは私の幼い魂の前にひよつくり立つて大聲に叫んだのだ。「開け、胡麻！」と。すると忽ち未知の扉が開き、私は自身の内外部世界に躍り込む。そこには支那のやうな印度のやうな波斯のやうな異様に混り合つた風俗が、胡弓や銅鑼の音の渦巻の中に明滅し、何時しか私は我を忘れてその無數の迷路の中を進んでゐる。右の窓からは緑の鸚鵡が、左の窓からは長い辮髪の男が、「坊ちゃん、坊ちゃん、日本の坊ちゃん。」と呼掛け、何とも云へない甘い花の香りが四邊

に満ちて、眼の前を黄金の輿が靜かに揺れながら通り過ぎ  
て行く。その輿の簾の間から細い美しい腕が出ると、黒人  
の従者達の頭越しに私の足許へ何か光るものを投げてよこ  
した。私は鋪道の上に身を屈めて、……「さかえ、さか  
え。」非常に現實の女の聲が私の夢を二つに引き裂いた。

——何度呼んだら判るらかよう。此の子は天狗にさらはれ  
たみたいにぼんやりして。おつしいがさめつちまふぢやあ  
ないかい。」私は逃げ去つて行く音楽や歡聲を一瞬たりと  
も引き止めようとして耳を兩掌で閉ぢながら、眼の前にふ  
きんを持つた儘驚いたやうな焦つたやうな顔をして立つて  
ゐる太つた伯母を、いつか怒りとも悲しみとも判らぬ表情  
で睨めつけ始めてゐたらしかつた。——それは常に私の感  
情の擴大された鏡である伯母の顔付の急變によつて忽ちに  
私の意識に反射して來たのだつたが。——私は初めて、興  
へられてゐる現實そのものを不滿に感じたりそれを改變し  
ようとしたりする、つまり現在此處にある状態と比べて現  
在此處にない状態に對する望みとか憧れとかを抱く、と云  
ふ傾向を覺えた。

『千一夜物語』は私に夢を教へたが、それはやがて死をも  
教へることになつた。或る朝、私は學校へ此の本を持つて  
行かうとして、本箱の中にそれがないといふことに氣付い  
た。早速學校カバンを調べ、机の上下を調べ、伯母にも訊  
いたが判らない。その時丁度學校へ行かうと毎朝の例で誘  
ひに來た隣の豆腐屋の利いちゃんに伯母は呼び掛けた。

「利いちゃん。うちのさかえん色刷の大きな本を知らんか  
ね。」利いちゃんは往來に面した窓から顔だけ覗きこんで、  
「知らんやあ。」「本當かえ。のお利いちゃん。誰にも言ひつ  
けやせんで、返しておくんない。あれはこの子のお父つち  
やが大阪でわざわざ買つて送つてくれた大事な高價い本だ  
で。のう内證にしてやるで。色鉛筆一本やるで。のう……」  
「わしらはほんとに知らんにね。」利いちゃんは伯母の口調  
に驚いて、急に丁寧な言葉遣ひになると、學帽を被り直し  
てこそこそと逃げ出した。——うそは泥棒の始めと云ふ  
が、あの年で盗みを働いたりしちあ、末は碌なもんになら  
んらよ。後で利いちゃん學校行つた留守に、家へ行つて謙  
さにもう一べん訊いてみすよ。……私には何故伯母が此の  
本の泥棒として利いちゃんを名指すことが出来るのか判らな  
かつた。今迄何度も私のところで此の本の挿繪を見たり筋  
を私から聞いたたりしてゐたが、利いちゃんの學力では未だ到  
底此んな本は讀めはしないのだ。それに隣家に住んでゐて  
朝晩顔を見合せるのにそんなことが出来ようとは想像もつ  
かない。一體、盗みと云ふやうな亂暴な行爲を、それまで  
は子供の私は自分の周圍で聞いたこともなく、出會つたこ  
とは更になかつた。泥棒と云へば大きな風呂敷を背中に負  
ひ、頬かぶりに片はしよりと云ふ傳統的な映像しか眼に浮  
んで來ないのだ。

私には苦勞しつづけの一生を、此の狭い田舎町に送つて  
來た伯母の、些細なことで近所に疑ひをかけたたり、周圍の人

の缺點を露いたりするやり口が嫌だつた。私自身に對してはあくまで寛大な伯母が世間に對すると突然に偏屈で醜惡な利己心を、時に私をぞつとさせる程示すのだ。幼い私はさう云ふ時に伯母に感ずる輕蔑、殆んど主人が目下のものに對して感ずるやうな貴族的な輕蔑をどうにもならなかつた。さうした感情は屢々父も伯母に對して抱いたらしかつたと云ふことは、其後私も氣付いたが、伯母の方でもさう云ふ父には（小兒の私に對してだけは特別だが）逆に一種の輕蔑、現實の瑣事に倦いものに對して（その理想は判らずに單に現實に失敗すると云ふ傾向のみを見て）抱く輕蔑を感じてゐたらしかつた。それが伯母と私との間で父の映像が夫々大變に違つてゐるのに其後私は驚かされ悲しまされることになるのだが。（それに伯母は一種の虛榮心から、世間に對しては私が父に對して抱く幻影に非常に近い、ただそれをより俗な物質的なものにした映像を持つてゐる振りをしてゐたことが、同時に私には突然に理解されたので、その偽善的な態度が更に私には嫌惡の源となつたのだが。）ところで伯母のその卑しい表裏の違ひの激しい對世間態度は、私に對する無條件な寛大さと同一の根を持つものである、若し伯母がその缺點を直して私の希望通りに高潔な人格者になつたとしたら、私の我儘な生活は一日も通用しなくなるかと云ふやうな反省は、幼兒の私には到底及ばなかつた。つまり伯母の精神のゆがみの激しさが、それだけ裏で私への愛情の激しさであると云ふ、愛そのものの秘密、後

年私が様々な場合に正面から此の問題に衝突することになつた、その秘密の最初の現れの前で、私はその後もさうであつたやうに初めから盲目であつたのだ。

その日學校で利いちやは一言も私と口をきかうとしなかつた、私は寧ろ謝りたい程だつたのに。その日は仕方なしに私孤りで學校から歸つて來ると、隣家の裏の小路の上で私は思はず立止つた。豆畑の向うから利いちやの父親の豆腐屋の謙さの、浪花節もどきの例のだみ聲が、初夏の眞晝の空氣を掻き亂して響いて來る。——そりや、わしらはお宅に家も借りてるし、無盡の世話人もお願ひしてるし、借金も判もついで戴いてるし、恩を言ひやきりがありません。

……いつも利兵衛の奴にや、口をすつばくして云ひきかせてをりますんね。お隣りは唯の隣りとは異ふ。一宿一飯の恩義と云ふことがその道でもあるが、お隣りの恩は俺とお前と二代がかりで返さしや返しきれん位だ。さかえはあの通り勉強も出來るし、末は大臣大將になる人だから、お前は連れだと思はずに旦那だと思へ。學校でさかえさんことを悪く云ふ奴があつたら、主家の大事だと思つてどづいてやりようよ。おんしはほんとの男になるやうにお父つちやが考へて利兵衛とつけたんだ。いつも云ふやうに、天野屋利兵衛は男でござんすの意氣込みだ。おんしや頭は親譲りでしょんないが、腹はお父つちやんやうに眞直になれ。一心太助んみたいに殺さば殺せ馬子の時と天びん棒を持つて地びたに横んなりや水野十郎左も指一本つけられぬら。

……そりよ、おんしが先い立つてさかえさん頭に手を上げるやうな眞似をすりや、はお親でも子でもないだぞ、判つたら、と毎晩寢物語にも聞かしてありますね。……それがあの利兵衛ん奴が、いくら馬鹿でもさかえさん本に手をつけるやうなことはありませんで。あいつん腹を立ち割つてお見せしたい位です。……腹を立ち割ると云ひや、あいつんお母あが腹膜をやつて、いつも云ふやうですん、あの永患ひん時あ、家賃も三年も溜める、入院だ何だで、乳飲子をかかへて商賣も出来ず、お前さんところから三度三度のものまで頂戴することになり、本當にあの時私私もつらかつたが、おりえも寢床ん上で兩手を合せて、お直さ、お前さん名を神様だと云つて死ぬまでお稱へして頂きましたね。それから此つち決してお宅の方へ足を向けて寢たこともない。犬畜生でも三年飼はれたら恩は忘れぬと云ひますでねえ。でも、そりやお直さ、いつも云ふやうですん。あの時は私らは男泣きに泣きましたです。本當につらかつたです。苦しい苦しいつて身をもがく口の下から、おりえは、お直さ、お前さん名を神様だと云つてお稱へして頂きましたね。……いつもの癖で豆腐屋の謙さの話は女房のおりえの臨終のことになると、——それも何かで昂奮すると、丁度『千一夜物語』の中で事件を運ぶために話の混沌の奥から突然に意表をつけて悪魔が立現れるやうに、謙さの心のランプは偶然にこすられ、あつと思ふ間にお定りのジェンニである此の臨終の女房の顔が、豆腐屋の論理を引

き裂くのだが、——必ず涙聲になりそして話は中断するのだつた。即ち此處まで来ると夜も明け初めたのでシェヘラザードは話を止めたと云ふ具合に。……私は『千一夜物語』の見えなくなつたことが、近所の大人の世界に、此んな波紋を捲き起したことに恐怖を感じると、裏口から家の庭へ黙つて駆け込んだ。やがて隣家から歸つて来た伯母は、幾先に腰掛けたままぼんやりしてゐる私を見ると、いつものやうに唯今とも云はずにそつと歸つてゐたことに不思議を感じて、庭石の上に立つて一寸私を見すゑたが、やがてその泣きはらした兎のやうな眼は次第に焦點を私の顔から遠く屋根の向うへぼやかして行きながら、太つたつやのいい兩手は前掛の端をひき千切れんばかりに強く揉んでゐた。『千一夜物語』は遂に此のやうにして失はれて了つた。私はその後本箱から本を出し入れの度に、その赤い表紙の大形の贅澤本を想ひ出した。伯母にとつては此の本の失はれたと云ふことは、自分の家から隣家に移つたと云ふことに過ぎず、それをもとのところへ返すやうに手配しないのは、謙さを苦しめることが可哀さうだと云ふ遠慮からだけであつた。——「のう、さかえ、利いちやん家はそりや貧乏家で謙さ朝から晩まであんなに働いても皆借金の子や何かによつちまふだ。利いちやんも碌な本一冊買つてやれんづらで。のう堪忍してやんない。またお父つちやに買つてもらへばいいだの。」そして私の顔が泣き出しさうに變つて行くと、伯母は急に狼狽して、「そりや泥棒をするこ



たあいこんだがの。お前がどうしても取返すと云ひや警察で来て、謙さあ連れて行くことになるでの。謙さあ真面目ない人だで、それにおかみさんを亡くした氣の毒な人だ。のう堪忍しておやんない。」……然し私は到頭聲を上げて泣き出してつた。私が悲しかつたのは、だが本が隣家へ持つて行かれたと云ふことではなかつた。私は隣りを調べても出て来ようなどとは信じられなかつた。さうではなく前の晩に見た夢を想ひ出したのだ。暗い底知れぬ谷間のやうなところを、無氣味な風に吹き曝されて、あの赤い本が見るも無慚に引き千切れながら、一直線に墜落して行く。開いた頁は私があんなにも大事にしてゐたのに、皺だらけになりひたひたと鳴り、やがて虚無に呑み込まれて了ふ。そして後には風の悲鳴ばかりが。……私は喪失と云ふことの本當の意味を知らされた。私の心には憤ひ難い空洞が出来た。一體、私達の手許にあるものが失くなるとはどう云ふことなのだらう。此の瞬間が若し數日前の今頃ならば、未だあの本は私の前の机の上にあつたのだ。そして私はそこに不思議な時間と云ふものに初めて氣が付く。此の世のことは一度起つて了へば何一つ取返しはつかない。時間は遡れない。それは突然の啓示だつた。伯母は喪失を位置の移動に置き換へて何らの不安を感じてゐない。然し私は物が存在しなくなると云ふことに初めて一種の形而上學的恐怖を覺えた。神隠しと云ふ言葉は私の感じたのと同じ此の神祕的な恐怖感の、古代人の間に芽生えた時生

れたものだ。そして道を歩いてゐる母と子が突然により高次の次元の世界に引き裂かれる。子供は母の見てゐる眼の前で、道の上から掻き消える。母親には泣き叫びながら次第に天の一角に遠ざかり行く幼児の聲が聞えるばかりだ、——と云ふ近代物理学者の次元の問題に關する斯うした夢のやうな幻想も、昔ながらの人類の喪失に對する恐れ、足許に忽ち深淵が開いて呑み込まれて了ふと云ふ恐れ、科學的文學的な再現なのだ。あの本でさへ全く豫告なしに見えるなくなり得るからには、あの本を私に與へた父そのものも、何時突如として消えて了ふかも知れないのだ。……最初の死よりの呼びかけが一冊の本から來たと云ふのは以上のやうな譚からだつた。

『千一夜物語』はそんな風にして、私の精神に夢——此の宇宙の持續の中に我々の小宇宙を生いきと彩るもの——及び、死——空虚感、一度夜空を染めた火花が、ふつと消えて了つた後の、儂さから恐怖に至る様々の魂の度合——の領域をはつきりと切り拓いてくれたが、もう一冊の私の好きな本、『千一夜物語』の失はれた後は急に私には貴重に思はれて來て私の最愛の書になつた『義經記物語』——すつきりとした紺の布表紙に源氏の紋章の笹龍膽を白く抜き、背に黄色で本の表題と上村登志雄と云ふ名が刷り込んである、そして枠入りの本文の所々に入れてある挿繪は江戸時代の初期に出た『義經記』の極めて稚拙な、そして仄かに後の浮世繪を豫想させてゐるやうな挿繪が、異様に生々と